

女性アスリートに対する ACL 再建術の問題点

津田 英一

弘前大学大学院医学研究科 整形外科学講座

膝前十字靭帯 (ACL) 損傷の大多数がスポーツ活動中に生じ、男性に比較し女性に発生頻度が高いことは確立されたエビデンスである。つまり女性アスリートは内的危険因子と高頻度に受傷機会にさらされる環境因子から、ACL 損傷のハイリスクグループと言える。アスリートにとって ACL 損傷治療の一つのゴールは競技復帰であるが、競技復帰により再受傷の危険性が上がるのも明白な事実である。再建術の改善により正常膝関節動態に近似した状態での競技復帰が可能となったが、再受傷の抑制効果については未だ不明である。

当科で 2004 年から 2010 年までに初回 ACL 再建術を受けた女性患者 226 例 (平均年齢 22 ± 11 歳) を対象に、再受傷について調査した。これまでに当科にて再々建術を受けた患者は 20 例 (8.8%)、また同時期に対側の ACL 損傷を受傷した患者は 15 名 (6.6%) であった。全例が競技スポーツ選手でスポーツ復帰後の外傷により再受傷しており、初回手術からの期間はそれぞれ平均 18 ± 15 カ月、 24 ± 10 カ月であった。初回手術時の平均年齢は 15 ± 2 歳、 16 ± 3 歳であり、いずれも全調査対象と比較して若年であった。競技種目では再損傷例、対側損傷例ともにバスケットボールが最多で、アルペンスキーと合わせた 2 競技で大多数を占めていた。再受傷予防への取り組みは、女性アスリートに対する ACL 再建術の問題点のなかでも急務を要するものと考えられた。